大阪公立大学出版会
No.49
NEWSLETTER
ニュースレター
Osaka Metropolitan University Press (OMUP)

目　次

- 新春鼎談　辰巳砂 昌弘・八木 孝司・金井 一弘 … 1
- 「学術書の価値を伝えていく」大学出版の使命　橋元 博樹 … 4
- 自著を語る(50)「オーストラリアの多文化社会をめぐるディスコースの分析」　仲西 恭子 … 6
- 自著を語る(51)「人権保育の理論的基礎〈大阪〉からの提言」　吉田 直哉 … 7
- 新刊書の紹介 … 8
- 編集後記 … 8

新春鼎談

大阪公立大学　学　長　辰巳砂 昌弘
大阪公立大学出版会　理事長　八木 孝司
編集長　金井 一弘

新年あけましておめでとうございます。

新しい巳年が始まりました。昨年12月に大阪公立大学学長 辰巳砂昌弘氏、弊会理事長 八木孝司、編集長 金井一弘が鼎談をいたしましたので、新年の冒頭に掲載をさせていただきます。

八木理事長　本日はお忙しい中、貴重なお時間をいただきまして誠にありがとうございます。今回は、弊会の編集長である金井も同席して鼎談をさせていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

辰巳砂先生には2020年発行のOMUPニュースレター（No. 41）において、特別寄稿をいただいたのですが、その時は大阪府立大学の学長というお立場でした。今回は大阪公立大学の学長ということで、新大学への想いなどをお聞かせいただけたらと思います。

大阪公立大学初代学長としての想い

辰巳砂学長　よろしくお願いいたします。このたび大阪府立大学・大阪市立大学が統合して大阪公立大学となりました。特徴として、これまではどちらかの大学に吸収されるケースが多かったのですが、学生数がそれぞれ8,000人程度の同じ規模の大学が統合するというのは前例がありませんでした。また学部として、市大には「医学部」、府大には「獣医学部」や「農学部」がある。「工学部」・「理学部」・「看護学部」は重なっているように見えるのですが、例えば工学部でみますと、府大は「航空宇宙」や「海洋」がありますが、市大には「都市系、土木、建築」があるというように、相補的でほぼ抜けのないラインナップとなりました。そのことから教育、そして研究も様々な組み合わせでシナジー効果を発揮できるので、いま「総合知」と「共創」を旗印として、これから共創研究を進めていこうとしています。それをイノベーションアカデミー構想として掲げて、産学官民共創による「イノベーションエコシステム拠点」を作ることを目指しています。今回、国のJ-PEAKS関連の大型資金が３つ採択されまして、文科省の施設整備事業で約20億円。その資金で、現在、中百舌鳥キャンパスに「スマートエネルギー棟」を建設しています。基金事業として55億円。現在、大学改革の種まきをしながら事業を進めているところです。

八木（以下職名略）　そうなのですね。「スマートエネルギー棟」の完成が楽しみですね。大きな大学、加えてバックグラウンドの違うところが統合したので、初めはどうなることかと思っていたのですが、国がそれを評価してくれているわけですね。１＋１は２以上に発展していくということですね。

辰巳砂（以下職名略）　そうです。国からの支援という点では、今までは公立大学は非常に弱かったんです。日本の大学には国立・公立・私立がありますが、国立と公立２つ合わせて20%か25%。あとは私立ですが、現在は公立が増えて、私立は減ってきています。いま公立大学の数は100を超えています。しかし、非常に小規模の公立大学が多いです。それに対して、大阪公立大学は真逆の動きをしていて、ダントツ大きいということで、それを我々の売りにしています。国も無

視できないようにする作戦です。今のところは目立っていますので、頑張らないといけません（笑）

大学出版会についての想い

八木　ありがとうございます。これから、どのように発展していくのか楽しみですね。

次に大学出版会の話をさせていただきたいと思います。

大きな大学にはだいたい大学出版会というのがあります。我々はNPO法人として、大阪公立大学出版会を運営しているのですが、出版会に対して何か想いというものはございませんか。

辰巳砂　「大阪公立大学」という名称は大学統合以前に出版会さんが先につけられていたようで（笑）

八木　そうなのです。当初は「大阪公立大学共同出版会」という名称で運営しておりましたが、西澤良記前理事長の時に、「共同」を取ってはどうかとのご提案がありまして、大学統合後、弊会も「大阪公立大学出版会」と名称を変更し運営をさせていただいております。

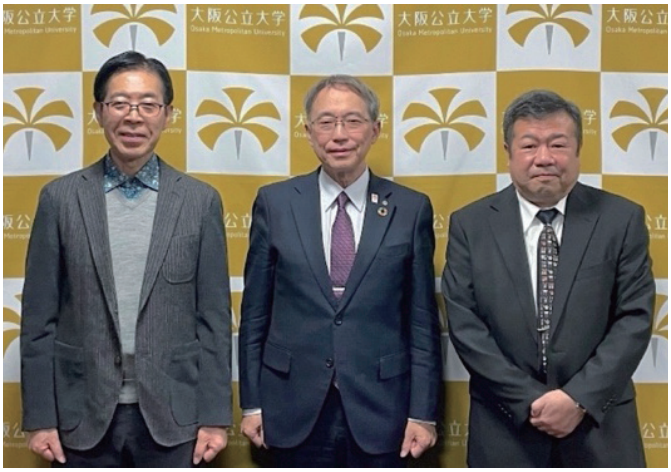
金井編集長　OMUPは2025年に25周年を迎えます。私は発足当時から関わっています。当時、府大創基120年を迎え、大学内に出版部を作ろうという機運があったそうです。しかし、色々と事情があったようで、結局、出版部は作れなかったのです。そこで、府大の農学部の先生が発起して女子大や看護大や、さらには同じく大学出版部ができなかった市大の先生方にもお声がけしたところ、賛同された有志が100人ほど集まり会費を集め、大阪公立大学共同出版会をスタートされました。知りえたところによりますと、年間100点以上出版されているトップの東京大学出版会も、当初は有志の寄付と会費を出し合って立ち上げられたそうで、OMUPは共通するところがあるなと感じています。

辰巳砂　そうですか。でもそういう成り立ちが自然かと思います。OMUPは、一般の人や普通の街の子どもたちを相手にしているわけではないので、大学としてこの組織は本当にありがたいと思っております。教員にしてもOBにしても、本を出したいという希望があっても一般の出版社からの出版はなかなか困難を伴うので、このニーズに応えてくださっているのがよいですね。個人的にも本当にありがたいと思っています。

八木　博士の学位をとられた文系の先生がたから博士論文を出版したいとの要望が多くあります。

辰巳砂　学位論文の中身を出版するという意味では、それはすごくありがたいんじゃないですかね。ある高名な先生が「論文を書くというのは生きた証を残すことだ」と言われています。

八木　はい私もそう思います。研究者にとって論文や本を書くということは、生きた証を残すということだと思います。ただ、大手の商業出版社に本の原稿を持ち込んでも「こんなの売れませんよ」で終わってしまうところを、OMUPが受け皿になっています。ほとんどの著者は売れなくてもいい、



売れたらなおいいくらいに思っておられます。先日も90歳を越えられた名誉教授の先生の出版をお引き受けしました。

金井（以下職名略）　私はOMUP編集長のほかに民間の出版社を運営しています。主に闘病記や障がい者の本を出版しています。生きた証ということでは、特にがん患者さんは告知された時点から死を意識しますので、自分が生きた証として「紙の本」を残したいというかたが多いです。

辰巳砂　売れる売れないよりも自分と関わった人やこれから出会う人も含めていろんな人に思い出してもらえるというのがまずメインで、それ以外の人にも届くから、こういう出版はやっぱりありがたいと思います。そういう出版社ってないんですよ、普通は。特にこの大阪公立大学に関わった人々にはOMUPの存在はすごく嬉しいですね。

電子書籍について

八木　以前のニュースレターの特別寄稿に電子出版のことも書かれていたと思うのですが、改めて理系の先生としてどのように思われますか。

辰巳砂　いまKindleなどの電子媒体がありますが、ニュース性の高いものや、その時見たら終わりというものは、どんどん電子媒体になると思うんですよ。今よりもっと賢くなって紙の本にかなり近い形のデバイスが出てきたら紙よりも電子媒体という形になるかも知れませんが、今の電子媒体では長く残すべきものには向いてないと思うんですね。今のものではパソコンのOSのバージョンが変わっただけでもう見ることができないですし。

八木　PDFがいつまでもあるかっていうと、そんなことないでしょうし。

辰巳砂　そうですね。今まで何千年も経て残ってきた紙とは異なるかもしれませんが、紙のようにめくれるけれども、瞬時に違うページに変わるとかね、そういうふうになるのはテクノロジーの問題なので、いつかできるとは思いますが。紙の媒体はやはり、10年とか20年とか、持っておきたいものです。そういう意味でも大学出版会は紙で残す意味のある出版会かと思います。

金井　紙の本の良さで、ある患者さんとお話した時に興味深

いことをおっしゃられました。入院している夜は孤独で寂しく明日への不安で眠れないことがあると。そんな時は、元気と生きる勇気を受け取った闘病記を抱きしめて寝ていたそうです。何回も読み込んでいるので、どこに何が書かれているかわかる。これがiPadだったらプチッと電気を切れば、ただの箱じゃないですかと。

八木　OMUPでも電子書籍を出したいという要望が徐々に出てきまして、今年、丸善雄松堂さんとMaruzen e-Bookの販売委託契約を結びました。現在OMUPの書籍６点が販売されていて、今のところ４冊が売れているという状態です。絶版になった紙の本は今後電子書籍として販売していこうと考えています。

辰巳砂　電子書籍が４冊売れるというのは、普通の本が４冊売れるのとどう違うんですか。

八木　現在、個人には売れていなくて、図書館に売れています。大学の図書館が電子書籍を買ったら学生は無料で読めるのです。

思い出に残る本

八木　辰巳砂先生の思い出に残る本とかお薦めの本などはございますか。

辰巳砂　私は長年研究をやってきましたから専門書とか教科書は書いていますが、読書は娯楽でしかありません。私は東野圭吾氏の本はほぼ全て読んでいます。

八木　東野圭吾氏は先生のお弟子さんですか。

辰巳砂　私が大阪府立大学の助手として赴任したのが1980年ですが、その時彼は工学部の３年生でした。アーチェリー部の主将でした。私の教え子ではありません。彼は就職後に最初の推理小説を書きました。

私は昨年、紫綬褒章をいただいたのですが、彼と同じタイミングでした。文科省系受章者への伝達式の折、後ろの席に彼が座っていたので、私は声をかけました。彼も私が母校の学長であると認識していて、昔話で盛り上がりました。その会話の中で、私は東野圭吾氏の人柄を垣間見ることができました。彼は「文学性」より「娯楽性」に徹したと言うのです。彼の全ての作品は非常にわかりやすくて読みやすくていつも夢中になります。彼の作品でいちばん好きなものを一つだけ挙げるとすれば『秘密』です。

八木　ほかに思い出に残る本はございますか。

辰巳砂　小学生の頃からミステリーが好きで、ずっと読んでいましたね。エラリー・クイーンとか。中学の時に図書館部に入って、今でも印象に残っているのは夏目漱石と森鴎外、そして芥川龍之介です。「蜘蛛の糸」は、お釈迦様が垂らした蜘蛛の糸につかまって登ってくるある罪人が、自分の下に続こうとする罪人達を蹴落とそうとする姿に、最後はお釈迦様が糸を切り落としてしまうお話。お釈迦様がだいたい曲者で、言うなれば、自分の手のひらの上で転がして、不意に思い通りに操る、そういう心を描く芥川龍之介の世界が好きなんです。

新年の抱負と期待

八木　鼎談の最後に新年の抱負を聞かせてください。

辰巳砂　新しい大学になって、これから発展しようという準備ができた頃かなと思っています。唯一無二の公立大学として、皆さんから「いい大学になってきたね」って言われるよう、種まきはちゃんとやりたいと思っています。

八木　大阪・関西万博にも出展されるとお聞きしましたが。

辰巳砂　はい飯田グループホールディングスという会社と共同パビリオンを出展します。関西ではあまり知られていませんが、関東を中心に展開しているトップクラスのハウスメーカーです。その会社との間で共同研究を進めていまして人工光合成やヘルスケア関係の研究成果をベースに共同パビリオンを出す計画を進めてきました。西陣織で飾られた大きな建物の真ん中に、未来都市のジオラマを置きます。家のエネルギーについては人工光合成による水素で発電するので、二酸化炭素が出ません。モデルハウスの中に入ると、いろんなセンサーがその人の健康状態を把握して、色々なアドバイスをくれます。また学生が発想した様々なイベントも実施しようと考えています。大学が万博に出展するのはたぶんこれが初めてだと思います。過去の万博で、そのようなこと聞いたことがないですから。前回1970年の大阪万博のときは中３でしたけどね。

金井　私は中２でした。大阪万博は夢がありましたね。皆で集まって入場料が安くなる夕方から自転車でよく行きましたよ（笑）。大阪公立大学では、学生のボランティア活動がすごく活発ですから、今回の大阪・関西万博では、学生が世界からやってくる障がいのある人たちの「おもてなし」を自然体でやってくれたらいいなと私は思っています。

辰巳砂　話を戻すと、OMUPに対しては、やはりオリジナリティの高い出版物を出してほしいですね。生きた証を残すにしても。ニューメキシコ大学の学長だったロバート・フランク博士の講演を酒井俊彦氏が訳した『イノベーションへの道』は非常に貴重ですね。こういう本を出してほしいなあっていうのはありますね。こういう本が割と簡単に出せるのは、すごくありがたいですよ。

八木　ありがとうございます。

辰巳砂　私も何か出させてもらおうかな。

八木・金井　はい。ぜひお願いします（笑）

朝日新聞デジタル「好書好日：じんぶん堂」に掲載された橋元博樹・大学出版部協会理事長のインタビュー記事を朝日新聞社の許可を得て掲載します。

「学術書の価値を伝えていく」大学出版の使命

橋元博樹・大学出版部協会理事長に聞く

記事：じんぶん堂企画室

大学出版部協会理事長の橋元博樹さん

大学と連携をしながら、主に研究や教育に関する書籍を刊行する「大学出版」。北海道から九州まで様々な大学の名前を冠した出版社が存在しています。そんな大学出版は一体どのような経緯で始まり、どのような使命の下に活動がなされてきたのでしょうか。そして出版不況と言われて久しく、電子書籍化が進む昨今、どのような役割を担っているのでしょうか。大学出版部協会理事長と東京大学出版会専務理事を務める、橋元博樹さんに話を聞きました。（文：篠原諄也　写真：北原千恵美）

●大学出版の三つの柱

――日本における大学出版の成り立ちについて教えてください。

橋元　日本の大学出版の創設は19世紀末まで遡ります。現存する組織と繋がっていて一番古い大学出版は、1886年に創設された早稲田大学出版部です。当初の主な目的は講義録を通信教育の学生に向けて販売することでした。それから東京電機大学出版部が1907年、玉川大学出版部（前身のイデア書院）が1923年に創設されました。

ちなみに（慶應義塾創設者の）福澤諭吉が出版事業「福澤屋諭吉」を始めたのは1869年なので、それを大学出版のルーツだと言うこともできます。ただその後社名や組織が変わったりしていて、現存する慶應義塾大学出版会の創業は戦後でした。

――海外ではどうだったのでしょうか。

橋元　アメリカの大学出版部も19世紀の同じ頃に創設されました。アメリカ最古のジョンズ・ホプキンズ大学出版局が1878年創設です。世界で最も古い大学出版はイギリスです。15世紀にはオックスフォード大学が、16世紀にはケンブリッジ大学が出版を開始しました。当時は印刷業者で「University Printer」という呼び方をしていたようですが、主に宗教書の複製を行っていました。グーテンベルク印刷機の登場によって出版が始まった最初期から大学出版は活動していたのです。

――日本の大学出版はどのような目的で創設されたのでしょう。

橋元　早稲田大学の場合は講義録の出版で、慶應義塾の場合は福澤諭吉の個人的な出版活動でしたが、多くの場合大学出版は、大学の先生が自分たちの研究業績を、自分たちで出版しようと考えて創設しました。

例えば、1951年に創立した東京大学出版会は、大学教員の有志が寄付を募って、自分たちの出版活動を始めようと立ち上げました。当時はすでに学術出版社は数多く活動していました。東大文学部の先生方は岩波書店と、医学部は金原商店（医学書院、金原出版）、法学部は有斐閣などと強い繋がりがあったんです。それでもやはり、先生たちは「日本でもオックスフォードのような出版部を作りたい」と考えました。そのように大学出版というのはどこであっても、文字通り大学が出版の当事者として、研究業績を社会に公開してきました。

――その根幹は現在にいたるまで変わっていないということでしょうか。大学出版の使命とはどういうものですか。

橋元　そんなに激動の変遷があるわけではないと思います。大学出版のミッションには三つの柱があって、学術書と教養書と教科書を刊行することです。

学術書は研究者の研究業績を研究者コミュニティに向けて発信する。それに対して、教養書というのは一般向けにわかりやすく書くものですね。それから教科書は大学の授業で使うテキストです。

三つの中でも一番核となるのが学術書です。大学出版は研究者に寄り添って、研究業績の受け皿になる役割があります。時には採算が取れないような市場性のない本も世に送り出します。一般の出版社にはなかなかやりづらいことを、大学出版が請け負ってきた歴史があります。

とはいっても、大学出版も出版社なので、売ることを目的としないわけにはいきません。単に経済的な話だけではなくて、広い読者に届けるという意味でもきちんと売ることは大事です。

●話題になった「らしくない」本

――書籍の電子化の流れについてはどのように考えていますか。

橋元　ここ20年ぐらいで電子化に大きく比重を傾けるような時代になってきました。多くの大学出版部や学術出版社が関心を持っていて、取り組みをスタートさせています。

実は学術書の電子化は早かったんです。世界では2000年前後から特に自然科学系の研究者を中心として、オンラインジャーナルが登場しました。今でも自然科学系の研究者は、書籍は読まない・書かないという人は多い。研究業績となるのは、書籍よりも論文、特に英語の論文を書くことなんですね。我々の仕事はそうした中でも、紙であろうが電子であろうが、一冊の本を書いていただくということです。それは変わらず今まで通りやっていきたいです。もちろん電子化は取り組んでいきますが、書籍を出版するという価値を我々がアピールしていかないといけません。

――論文と比べた時の書籍の意義や魅力とは何でしょう。

橋元　論文というのは、研究者が先行研究を踏まえた上で新しい知見を加えて、研究者に向けて発表するものです。一方、書籍にする場合は、それらの研究成果をベースとしながらももっと広い読者に向けて作っています。専門家コミュニティだけではなく、その外側にいる一般の読者、隣の研究領域の研究者などに向けています。そこでの論文と書籍の一番大きな違いとして、多くの場合書籍には編集者が介在するという点があります。

商品かどうかの違いも大きいでしょう。売り物を作るというと一見ネガティブな印象があるかもしれません。でも著者も編集者も出版社も、売るためにはいいものを作ろうとします。例えば、読みやすい文章にしたり、目次や章立てを工夫したりする。そうしたプロセスが書籍の強みともなります。

――最近、大学出版で話題になった本を教えてください。今回、学術書と教養書を一冊ずつ推薦書として選んでいただきました。

橋元　まずは学術書としては『杉浦康平と写植の時代』（慶應義塾大学出版会）。デザイン論の研究をされている阿部卓也先生が、著名なブックデザイナー・杉浦康平さんと写植を題材に、日本のブックデザインの歴史について論じています。

毎日出版文化賞やサントリー学芸賞を受賞するなど、非常に高く評価されて話題になりました。こういう分野の研究書は今まで出ていなかったので、本当に先駆的で優れた作品だと思います。同時に、専門的な知識がないと読めないような難解な本ではなく、一般の人も読みやすいように工夫されています。そして、ブックデザインの本だけあって、装丁もきれいですね。

――もう一冊は、大学出版らしくない意外な本とのことでした。

橋元　『言語学バーリ・トゥード Round 2』（東京大学出版会）です。言語学の研究者・川添愛先生がプロレスや芸能ネタをうまく使いながら、我々が普段テレビなどで耳にする言葉を分析しています。レイザーラモンRGの「あるあるネタ」はなぜ面白いのか、「飾りじゃないのよ涙は」という倒置はなぜ印象に残るのか。そうしたトピックが言語学の観点から論じられます。

文章がとても巧いので、楽しく読むことができるはずです。１巻目がとても話題になってメディアでも多く取り上げられたんですが、今回はその２巻目になります。装丁も賑やかで、学術書っぽくないですね。学問の面白さをなるべく広い読者に届けられたらと思っています。

●高校生を読者として意識

――出版不況と言われる中、大学出版は何か意識をしていることはありますか。

橋元　出版業界が厳しい状況にあるのは、日々実感をしているところです。ただ、その厳しさの一つは雑誌の落ち込みです。書籍ももちろん売り上げが落ちていますが、雑誌ほどの激減ではないんですよね。

書籍は出版業界の人たちがなんとか頑張って残していこうと動いている。ただ日本の出版業界は、雑誌が落ち込んで、書籍だけが生き残るという風になっていなかった。どちらも同じような仕組みの中で流通されていったので、雑誌の売り上げが落ちてくると、その流通のシステムが維持できなくなっている。書籍だけの出版流通になった時に、どのようにデザインをし直すかということが今の課題です。

出版業界といっても、エンタメからビジネスまで様々なジャンルがあります。その業界の中で、わたしたちは大学出版や学術出版を守っていくべきだと思うんです。そのためには、学術書の価値を社会にしっかり伝えていかないといけません。研究者コミュニティの中で、どのような価値を提供できるのか。一般社会の中でどんな価値を提供できるのか。それを我々自身が捉え返し、しっかりと世の中に問うていきたいと考えています。

――大学出版においては、学生という存在をどのように意識していますか。刊行された書籍が学問の世界の入り口になることも多いと思います。

橋元　いろんな統計データを元に「学生が本を読まなくなった」とずっと言われてきました。でも一方で（全国学校図書館協議会の調査など）小学生・中学生は実は本を読んでいるというデータもあります。だからあまり学生は本を読まないと思い込まない方がいいかなと思っています。

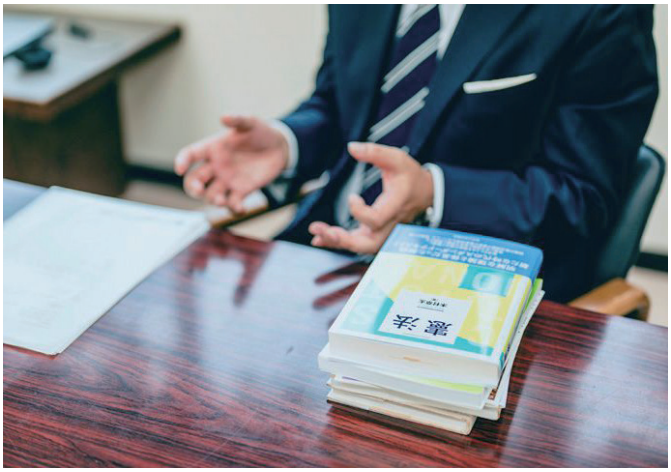
わたしたち東京大学出版会も、高校生を読者として意識をしています。東大のオープンキャンパスでブース販売を行うと、高校生が結構難しい数学書などの学術書を購入するんです。もちろん東大を受けるような高校生なのですが。世の中には世代を問わず、読書好きな人が必ずいます。雑誌などのエンタメ系の出版が苦境にあるのは、インターネット上で手軽に無料情報が得られていることがあります。一方、学術書の読者は、インターネット上の無料情報だけで満足するということはないはずです。今後、読者が急激に減ることはないかなと考えています。

●オンライン時代の取り組み

――これからの大学出版の取り組みについて教えてください。

橋元　大学出版が目指していくこととして、電子化と国際化があります。電子化については、まだまだ大学出版・学術出版社が取り組む余地が大いにあります。

そして電子化といっても、書籍を電子書籍として発行すること以外にも、様々な側面があります。近年は書店店頭に陳列している学術書が少なくなっています。これまでのように書店で、読者が、本と触れて購入に繋がるということが、だんだん学術出版に関しては少なくなってきているんです。その代わりに読者はオンラインで本のことを知って購入する機会が増えている。大学出版も電子書籍を作るというだけではなく、オンラインでの宣伝活動・営業活動を活発にすることが課題です。そうしておけば、オンラインを通して海外でも宣伝・流通・販売させることは難しくないと考えています。



憲法学者・木村草太さんによる新刊『憲法』（東京大学出版会）。立憲主義の歴史から説き起こし、憲法のしくみを解説している。初学者にも適した教科書

オンラインの時代になって何が変わったかというと、SNSなどで出版社が読者と直接繋がることができるようになったことです。本をめぐる世界は、出版社がいて取次があって、書店員がいて読者がいるという繋がりだけではなくなりました。著者が直接読者と繋がっていくこともできます。もっとそれを利用して、読者のコミュニティや研究者のコミュニティにアプローチしていきたいと考えています。

橋元博樹（はしもと・ひろき）
1967年生まれ　鹿児島市出身　人文書出版社勤務を経て、2000年東京大学出版会に入職。販売部長、営業局長、常務理事を経て2023年１月より専務理事、同年５月より一般社団法人大学出版部協会理事長を務める。書店・取次への営業活動を行いながら、学術書のデジタル化事業や書籍の海外流通事業にも携わる。NPO本の学校理事。

自著を語る（50）

オーストラリアの多文化社会をめぐるディスコースの分析

著者：仲西 恭子

A5判、並製本、272頁
2,860円（本体価格2,600円+税）
978-4-909933-73-7 C0080

本書は、白豪主義の終焉から約半世紀たったオーストラリアの多文化社会の諸相を「政府および首相」、「メディア」、「マイノリティ」の３つの視座から分析する批判的ディスコース研究である。前半では、まず、政府が発行する多文化政策報告書の分析を行い、マルコム・ターンブル率いる自由党・国民党連合政権の多文化政策の特徴、多文化社会に取り組む姿勢、理想とする移民像を明らかにしている。次に、同政権下で再燃した人種差別禁止法第18条C項の改正論争に焦点を当て、改正に意欲を示す首相のスピーチとそれを報じる新聞記事を分析し、首相および各紙の当該論争における立場とディスコースの種類を明らかにしている。後半では、オーストラリアの多文化社会について、移民側からの視点を得るために、

作家・コラムニストとして活躍するアジア系オーストラリア人二世のナラティブを取り上げ、インタビューの中でどのようなストラテジーを用い、どのようにアイデンティティをディスコース的に構築しているのかをポジショニング理論を用いて分析している。

本書は博士学位論文に加筆修正を行ったものであるが、研究の最初の契機は、オーストラリアに大学院留学をしていた2001年まで遡る。当時、オーストラリアでは庇護希望者の数が急増し、その受け入れをめぐって世論が二分されていた。そこに9.11米国同時多発テロ事件、バリ爆弾テロ事件が起き、国家の安全に対する国民の関心が一気に高まると、庇護希望者とテロリストを同列に扱うような新聞報道が現れはじめた。これが、オーストラリアのメディア・ディスコースと公的ディスコースに関心を持つことになったきっかけの一つである。もう一つは、留学先の大学キャンパスに大勢いたアジア人留学生たちの存在である。彼らは卒業後の永住権の取得を目指していたが、2001年に移民法が厳格化されたため、移住計画を変更･延期するなど､影響を受けた者も少なくなかった。それでも何とか永住権や市民権を取得した彼らは、キャリアサイクルの中期にさしかかった今、オーストラリア社会にうまく溶け込めているのだろうか。こうした問題意識がアジア系オーストラリア人のアイデンティティ研究へと繋がった。

今回の研究をできるだけ早く出版という形でまとめたいと思っていたところに、OMUPとのご縁をいただいた。八木理事長、金井編集長、そして編集部の皆様には、常に丁寧な対応をしていただき、感謝に堪えない。この出版を一つの区切りとし、これから新たな研究に踏み出したい。

（関西外国語大学短期大学部　教授）

自著を語る（51）

人権保育の理論的基礎

〈大阪〉からの提言

著者：吉田 直哉

A5判、並製本、86頁
1,980円（本体価格1,800円+税）
978-4-909933-79-9 C3037

本書は、戦後の大阪において展開された局地的な保育運動である人権保育の基盤となった理論の全体像を俯瞰する、はじめての「人権保育理論入門」である。人権保育は、保育運動としては、〈大阪〉という大都市エリアにおいて集中的に展開されたものであった。だが、〈大阪〉において、実践論との弁証法を経て生成された保育理論は、〈大阪〉ローカルなものにとどまることなく、普遍性を有するのではないかと思う。

人権保育論は、被差別部落を中心とする同和保育を起源としながら、貧困、障害、ジェンダー、異文化という多様なテーマを包摂しつつ、普遍的な保育理論へと発展してきた。本書では、人権保育論の先駆者であった二人の教育学者、鈴木祥蔵（しょうぞう）と玉置哲淳（てつじゅん）の保育論を読み解きながら、人権保育の基礎をなす人間論、発達論、方法論のもつオリジナリティを浮き彫りにしている。人権保育論は、保育集団を構成する子どもの多様性と、その背景にある家庭の多様性、家庭が所在する地域特性の多様性を尊重し共生することを、理念に掲げてきた。園内での子どもの集団づくりを、地域コミュニティのモデルとし、共生的な関係性を園から地域へと拡張させ、弱者・少数者を包摂するコミュニティを創造する実践を生み出してきた。既存の人権保育に関する書籍には､実践報告論集、あるいは基礎概念の入門書が多く、人権保育の「理論」の全体像を簡便に掴むことのできる文献がないというう｡らみがあった。本書は、その間隙を埋めるべく書かれている。

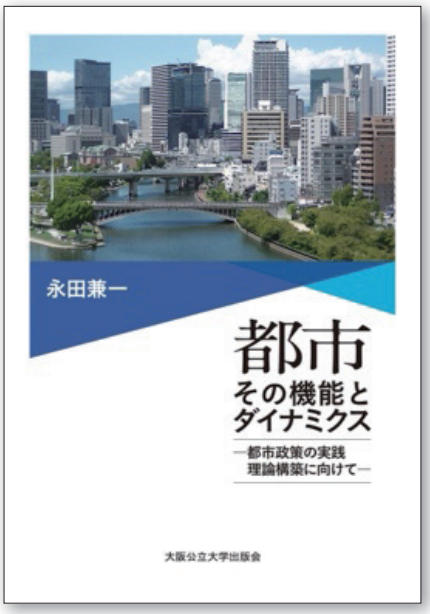
人権保育は、「個人の発達か、集団の発展か」という保育理念の二項対立を乗り越えようと、理論・実践の両面から試みてきた。すなわち、保育理念としては主体としての子どもの個の育ちを重視しながらも、保育方法としては集団主義を採用するという形で、両者の統合を図ってきた。人権保育の到達点を明らかにすることで、「個人か、集団か」という不毛な二項対立に陥っている、現在における保育思想・理念の分裂を乗り越えるための新視点を提供できると著者は考えている。

本書が焦点を当てたのは、①人権保育論が、保育の究極的な価値的理念としての〈人間〉をどう捉えてきたか、②人間形成を実現するための必須の条件としての人間関係はどのようなものであるべきだと考えられてきたか、③そのような人間関係を構築し、維持していくためにどのような取り組みが必要だと考えられてきたか、という三点である。

本書は、小さな本である。決して保育理論の「教科書」ではない。「実践書」でもない。しかし、保育において、理論と実践は乖離しえない。人権保育の理論は、どこまでも実践から生まれ、そして実践へと還元されることで、実践を理論化しうるということ、このことを、人権保育の先駆者二人は体現してくれているように思う。人権保育の射程の広さを確かめるための一石として、本書は投じられる。

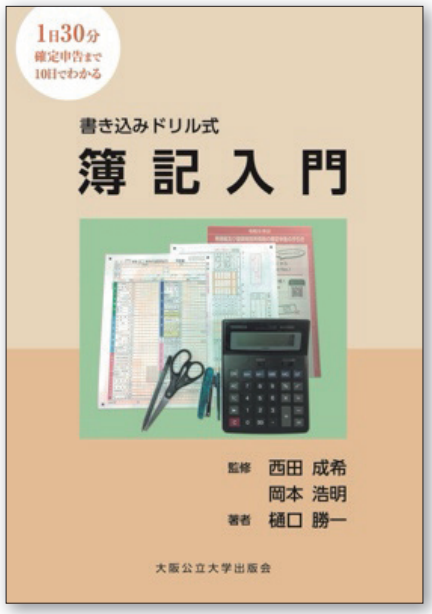
（大阪公立大学　准教授）

新刊書の紹介

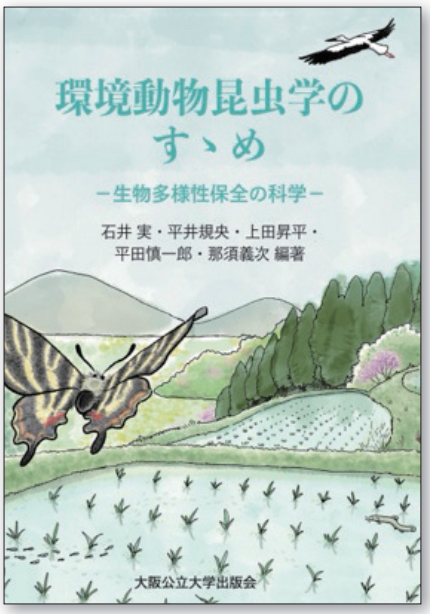


都市その機能とダイナミクス
—都市政策の実践理論構築に向けて—
著者：永田 兼一
A5判、並製本、226頁
2,750円（本体価格2,500円+税）
978-4-909933-81-2 C0036

伊賀四国八十八か所霊場めぐり
—豊かな自然の中にある古刹の数々—
著者：佐藤 典子
A5判、並製本、112頁
1,980円（本体価格1,800円+税）
978-4-909933-83-6 C0015



書き込みドリル式 簿記入門
監修者：西田 成希・岡本 浩明
著者：樋口 勝一
B5判、並製本、67頁
1,100円（本体価格1,000円+税）
978-4-909933-90-4 C0034



環境動物昆虫学のすゝめ
—生物多様性保全の科学—
編著者：石井 実・平井 規央・上田 昇平・
平田 慎一郎・那須 義次
A5判、並製本、455頁
5,500円（本体価格5,000円+税）
978-4-909933-77-5 C3045

編集後記

新年明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

2024年11月11日から12月12日までOMUPブックフェア「大阪公立大学の先生の本」を中百舌鳥キャンパス生協ブックストアにて開催しました。多くの学生が立ち読みして、授業ではわからない教員の著作を知る機会になったのではないかと思います。

昨年、OMUPは21点の書籍を刊行いたしました。今年も多くのかたの出版をサポートしていきたいと思います。ご連絡をお待ちしております。

昨年は災害が多い１年でしたが、今年は皆様が明るく元気に過ごせるようお祈りいたします。（Y）